

第5回学生社会意識調査

—— 調査結果とその分析 ——

The Fifth Research of Student's Social Consciousness

山田全紀 岩本 勲 瀬島 順一郎
Masanori Yamada Isao Iwamoto Junichiro Sejima

はじめに

1980年代の学生の社会意識を調査するために岩本と瀬島によって始められたこの調査は、隔年ごとに実施され、今回で5回を迎えた。次回の調査をまって一応の区切りがつけられるまでの年数と回数を数えてみれば、塵も積もれば山となる、継続は力なり、と自負することも可能なほど、経年比較と大学間の比較のデータがそろい始めた。十年一日か、それとも十年一昔か、少々気の早い関心をも部分的に先取りして、とりあえず今回の調査結果とその分析の報告を、これまで陰から応援してきた山田も加わってお届けする。

(1) 調査目的

1980年代における大学生（短大生を含む）の社会意識の経年的変化の分析

(2) 調査項目

政治意識、余暇の過ごし方、読書傾向、細目については後掲調査票を参照

(3) 調査対象

大阪産業大学(155名)、大阪大学(256名)、大阪経済大学(122名)、三重大学(218名)、帝塚山短期大学(124名)、三重短期大学(102名)、総計978名のいずれも一年次生を対象、内、男624名、女350名、コード不明4名

(4) 調査方法

質問紙法による集団調査

(5) 調査期間

1987年6月20日～7月10日

調査の目的からして、項目、対象、方法、期間には、できるだけ異動がないように配慮された。とくに今回は、回答選択肢に一部削除と追加があるものの、前回と全く同じ質問項目が設定され、軍事費の対GNP1%枠突破問題と、原子力発電問題についても、前回にひき続き問われた。

分析については、政治意識を岩本が、余暇の過ごし方を山田が、読書傾向を瀬島がそれぞれ分担当した。いずれの分野においても、男女別あるいは大学別に特徴ある分析結果を見せ始めており、この結果は、巨視的には将来社会の展望に、微視的には各大学教育における対応に、少なからず示唆を与えるものと思われる。

調査にあたっては、今回も帝塚山短期大学の森一貫教授にご協力を賜わった。集計作業では

三重短期大学の心理学ゼミナールの学生の皆さんに手伝っていただいた。集計処理、データ作成は三重電子計算センターをお願いした。紙面を借りて厚くお礼申し上げたい。また、第3回以採ひきつづき、この調査は大阪産業大学産業研究所の特別研究費の援助をいただいている。お礼を重ねて、深く感謝したい。

第 I 部 政 治 意 識

(1) 政治的満足度

表 I - 1 政治的満足度

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
政治的満足	10.3	14.2	9.1	8.3	12.0	13.7	10.0	10.6	7.4	15.1	6.7	6.3
どちらともいえない	34.6	38.6	31.0	32.3	29.3	35.0	28.2	26.2	44.0	45.7	37.3	38.0
政治的不満足	54.9	47.2	59.9	59.2	58.7	51.1	61.7	63.1	48.6	39.3	55.5	55.4

(80年調査は、サンプルが少なく、経年比較の資料としては不充分なので、81年調査以降のデータを使用した。以下、第I部では同じ。)

今回の調査結果の特徴は、前回(85年)よりも、政治的満足層が減少し、政治的不満足層が増大して大体80年代前半の水準にもどったことである。政治に「非常に満足」0.5%、「やや満足」9.8%、合計10.3%となり、政治的満足層は前回より約4ポイント低下した。逆に政治的不満足層は、「やや不満」40.7%、「非常に不満」14.2%、合計54.9%で、前回より約8ポイント増加した。このような傾向は、自民党が86年同日選挙で圧勝し、その勢によって売上税を遮二無二おしつけようとしたことの端的な反映とみることができる。

男女別では、政治的満足層も政治的不満足層もともに男子が多く、不満層が女子より約10ポイント上回り、そのうちでも「非常に不満」が約10ポイント上回っていることが目立っている。「どちらともいえない」では、女子が男子を15ポイントも上回り、判断停止型の学生が女子に多いことを示している。このような男女別の傾向は例年のとおりである。

大学別では、政治的満足層のトップは大阪産業大学16.8%、次が大阪経済大学15.5%、一方、政治的不満足層のトップは大阪大学62.9%、次が三重大学60.1%となっている。

(2) 政治に満足しない理由

表 I - 2 政治的不満原因の上位3位

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
政党や政治家は党略・私利のみを追求する	52.6	51.4	54.2	48.8	52.6	53.8	53.2	52.7	52.5	46.5	56.6	45.3
汚職や選挙違反など不明朗なことが多い	25.9	30.9	32.0	41.8	26.4	29.8	28.9	36.5	25.0	33.4	39.0	46.3
平和と民主主義を守る努力が払われていない	20.0	22.7	27.5	21.1	19.5	21.4	26.0	23.6	20.7	25.1	30.9	18.7

(回答は2つを選択)

日本の政治に満足しない理由のトップは、「政党や政治家は党利・党略や私利・私欲だけを追求している」52.6%で例年とほとんど変化はない。2位は、「汚職や選挙違反など不明朗なことが多い」25.9%で、これは過去の調査中では一番低い。ロッキード事件が、もう人々の意識の中で風化してきていることの現れであることはまちがいない。3位に、「快適な自然環境が保障されていないから」21.7%(前回比7.8ポイント増)が急浮上し、4位に「派閥争いなど、政党の活動がみにくいから」20.1%、5位に「平和と民主主義を守る努力が払われていない」20.0%などが上っているが、3～5位の順位はほとんど同率とみてさしつかえない。3位に環境問題が出てきたのは、例年にはみられないことである。これは、チェルノブイリ事件以後、原子力発電に対する不安が高まってきたことと関連しているのかもしれない。「派閥争い」の割合が例年よりも高いのは、恐らく、自民党総裁選に向けての自民党各派の動きに対する批判的見解の現れともいえよう。とにかく、学生が政治不満とする原因に、1～3位まで、いずれも政治のダーティーな側面を挙げていることは興味深い。「平和と民主主義」の割合は、大体例年どおりとみてさしつかえあるまい。6位は「物価高などで生活が楽にならないから」19.8%(3ポイント増)で、これも3～5位と実質的には差異のない率を示している。ここ数年消費者物価上昇率は鎮静化しているにもかかわらず、「物価高など」が政治不満の原因として上昇してきたことには注目してよい。総理府や経済企画庁の調査でも86～87年頃から、国民の中流意識にかけりが生じてきたことを指摘されているが、学生もその事実を敏感にとらえているといえるであろう。

男女別では、ほとんど差異はないが、「自然環境」で男子が約7ポイント、「社会福祉政策が不十分」で女子が約5ポイント上回っている。

学校別では、いくつかの特色ある違いが出ている。「物価高など」で1位が三重短期大学29.9%、2位が大阪産業大学26.4%、3位が大阪経済大学29.1%、最下位が大阪大学12.4%となっている。「適切な文教政策がとられていない」で、1位が大阪産業大学28.7%、2位が大阪経済大学28.2%、最下位が大阪大学10.3%となっている。これら2項目での数字は、三重短期大学は別として、いずれも私学学生の政府に対する不満を端的に表明したものと見える。この傾向は前回とはほぼ等しい。その他の項では、「汚職」「党利・党略」でそれぞれ大阪大学がトップを占め33.0%、63.5%となっている。全体の平均値よりもかなり高い。

(3) 政治的関心度

表 I - 3 政治的関心度

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
政治的関心がある	60.6	52.9	44.5	55.7	62.9	56.9	45.7	64.6	56.0	45.2	41.8	42.0
政治的関心がない	38.4	46.1	40.9	40.5	36.0	42.2	40.6	33.4	42.9	53.7	41.8	51.7
無 効	1.0	0.9	14.6	3.8	1.0	0.8	13.8	2.1	1.1	1.1	16.4	6.5

政治的関心層は、「非常に関心をもっている」8.0%、「多少関心をもっている」52.6%で合計60.6%、と前回よりも約7ポイント上昇している。これまでの調査のうちで最も高い数値を示している。これが何に起因するか今のところはっきりとは分らないが、やはり自民党の後継者争いが連日マスコミによって報道されていたこと、およびテレビがこれを増幅して伝えてい

ること(第Ⅱ部(3)テレビ・ラジオに関する分析を参照せよ)等に関連するのであろう。

政治的無関心層は、「あまり関心をもっていない」32.4%、「ほとんど関心をもっていない」6%、合計38.4%で前回よりも約8ポイント低く、またこれまでの調査のうちでも最も低い。

男女別では、政治的関心層は男子が女子を約7ポイント上回っているが、この差は前回よりも小さい。政治的無関心層は女子が男子を約7ポイント上回っているが、やはり前回よりその差は縮まっている。

大学別では、政治的関心層のトップは、大阪大学69.6%、次が三重大学59.2%、最低が大阪産業大学53.6%となっている。

(4) 政治に関心をもつ理由

表 I - 4 政治に関心をもつ理由の上位 3 位

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
自分の生活に関係する	48.8	43.0	45.2	43.2	46.1	39.3	43.8	35.5	54.1	52.2	49.1	61.6
平和と民主主義を守るため	17.9	23.0	24.1	25.0	18.3	23.1	24.9	29.0	16.8	22.6	21.4	15.4
政治が面白いから	21.8	18.5	18.8	22.2	22.9	20.4	20.6	22.6	19.9	13.8	14.3	23.1

政治的関心をもつ理由は、「自分の生活に関係するから」48.8%、「政治家や政党の動きが面白いから」21.8%、「平和と民主主義を守るため」17.9%となり、他は10%未満である。1位の順位は例年どおりであるし、その割合も例年と大差はない。だが今回、2、3位の順位がはじめて入れ替った。「平和と民主主義」の項は前回ぐらいから低下傾向をみせていたが、今回もまた低下し、前回比で約5ポイント低く、最高時の81年調査より7ポイント低下した。一番変動が大きいのは男子で、前回比で約5ポイント低下し、81年調査より10ポイント以上も低下した。

男女別では、「自分の生活に関係するから」で、女子が男子を8ポイント上回っている。これも例年どおりで、女子が政治を身の回りの視点からみる傾向の強いことを示している。その他の項目については、男女差はあまりない。

学校別では、「自分の生活」で三重短期大学56.7%、三重大学53.5%の順で、大阪大学41.6%が一番低い。「平和と民主主義」で、三重大学24.0%、大阪大学20.8%の順で、大阪経済大学5.7%が一番低い。

(5) 政治に関心をもたない理由

表 I - 5 政治的無関心原因の上位 3 位

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
政治の問題はむづかしい	35.4	33.3	24.3	34.4	25.8	25.5	20.8	18.8	49.3	46.0	32.1	50.0
個人の意見は政治に何の影響も与えない	27.7	29.7	32.6	31.3	32.4	34.6	31.2	37.5	20.7	22.2	35.7	25.0
個人の生活に関係ない	14.6	12.1	16.3	9.4	16.0	11.7	16.0	12.5	12.7	12.7	17.0	6.3

政治的無関心の理由は、「政治はむつかしくてよくわからないから」35.4%、「個人の意見は政治に何の影響も与えないから」27.7%、「自分の生活に関係ないから」14.6%となっている。83年調査を除いて、この順位をそれぞれの数値は、ほぼ毎回変りはない。

男女別では、「政治がむつかしい」と考える層が、女子が男子のほぼ2倍になっている。このような大きな較差は、これまでの調査のうち一番である。伝統的な政治無関心の型が女子大生を支配している。一方、「個人の意見は何の影響も与えない」とする層は、男子が女子を約12ポイント上回っている。男子の政治的無関心の理由では、これが、「政治はむつかしい」を約8ポイント上回ってトップとなっている。したがって、男子の場合の政治的無関心は、ある程度近代的な型を示しているといえる。これらの諸傾向は例年のとおりである。

学校別では、「政治はむつかしい」で三重短期大学55.3%、帝塚山短期大学50.9%の順になっているが、これは学校別というより、男女別に起因するところが大きい。「個人の意見は何も影響を与えない」で大阪産業大学30.0%、三重大学24.2%の順となっている。「自分の生活に関係がない」で、大阪大学23.7%、大学産業大学17.1%、その他の大学は10%前後となっている。

(6) 支持政党率

表 I - 6 支持政党率

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
支持政党あり	15.7	17.4	19.0	18.3	19.1	19.1	20.9	22.0	9.7	13.9	14.6	15.0
支持政党なし	75.9	77.0	78.5	78.4	72.9	75.8	76.1	75.6	81.1	79.5	84.0	80.7

「支持政党あり」は15.7%で、これまでの調査の最低を記録した。年々、「支持政党あり」が低下している。

男女別では、男子の「支持政党あり」層は2割に迫まっているが、女子はその半分にしかすぎない。

大学別では、大阪経済大学22.1%、大阪産業大学21.9%の順で支持政党あり、としている。

(7) 特定政党支持率

表 I - 7 5政党支持率

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
自 民 党	47.4	64.1	44.0	52.6	48.7	61.5	41.1	44.0	44.1	71.4	53.8	64.4
社 会 党	24.0	9.8	11.3	16.2	23.5	11.1	10.9	21.0	26.5	6.1	12.8	9.6
公 明 党	8.4	9.2	7.7	8.1	7.6	8.9	8.5	8.0	11.8	10.2	5.1	8.2
共 産 党	13.0	7.1	16.1	13.3	10.9	8.9	17.1	14.0	17.6	2.0	12.8	12.3
民 社 党	3.9	2.7	5.4	4.0	5.6	3.7	6.2	5.0	0	0	2.6	2.7

支持政党ありと答えた学生のうち、自民党47.4%、社会党24%、共産党13.0%、公明党8.4%、民社党3.9%の支持率順となっている。自民党支持率は前回より約17ポイント落ち、逆

に社会党支持率が約14ポイント、共産党支持率が約6ポイントそれぞれ上昇した。公明民社はほぼ現状維持となった。このような傾向は、4月に行われた統一地方選挙における選挙民の政治的動向とピッタリ符合している。統一地方選挙の道府県議会選挙で、自民党が結党以来の大敗を喫し、社会党が長期低迷のなかで久々に勝利し、共産党も議席を3割近く伸ばしたのである。売上税をめぐる各党の態度が、ここに反映しているとみてさしつかえない。

男女別ではあまり差異はないが、公明党支持、共産党支持で女子の優位が目立つ程度である。

大学では、自民党支持が、帝塚山短期大学52.9%、大阪経済大学51.9%、大阪大学51.0%といずれも5割台を記録している。社会党支持で三重短期大学50.3%、共産党支持で三重大学28.6%、公明党支持で帝塚山短期大学17.6%のそれぞれが1位を占めている。

(8) 特定政党を支持しない理由

表 I - 8 特定政党を支持しない理由

(%)

	議会制における政党そのものに意味がない	政党の政策に大した違いがないから	自分の意見や利益を代表してくれないから	派閥争いや党利・党略の追求に終始している	清潔な政党がないから	その他	無回答
全体	4.0	12.9	7.4	29.8	4.7	11.2	29.9
男	5.3	10.8	9.0	32.1	4.8	11.9	26.2
女	2.1	16.2	4.9	26.1	4.6	10.2	35.9

(調査年度毎に回答の選択肢が少し異なるので経年比較はできなかった)

特定政党を支持しない理由のトップは政党が「派閥争いや党利・党略の追求に終始している」29.8%、次が「政党の政策に大した違いがないから」12.9%、その他の諸項目は10%未満となっている。政治的無関心の理由の場合でも、「政党が党利・党略に終始する」という回答が上位を占めたが、ここでも同様の傾向が確められる。ただし、この質問にたいして理由は不明だが今回はじめて無回答が29.9%にもものぼっていることが特徴的である。この無回答者は恐らく、政治的無関心層のうちでも、「政治はむづかしい」「自分の生活に関係がない」と答えた層と重なると推測される。自分がなぜ支持政党をもたないかその理由を自覚することは、かなりの政治的関心度を要求されるからである。

男女別では、「派閥争い」で男子が女子を6ポイント上回り、「政党の政策にちがいがいい」で女子が男子を約5ポイント上回っている。

大学では、「派閥争い」で大阪大学35.1%、三重大学34.9%、「政党の政策にちがいがいい」で三重大学21.8%、大阪産業大学15.5%となっている。

(9) 新聞を読む割合

表 I - 9 新聞を読む割合

(%)

	全体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
新聞を毎日読む	75.1	77.0	72.8	75.5	75.3	78.5	73.4	75.2	74.5	73.6	71.6	75.7
新聞を毎日読まない	22.8	21.5	24.6	22.5	22.4	20.5	24.2	23.3	23.4	23.6	25.7	21.7

新聞は、現実政治の一番身近で豊富な情報源である。だから、政治的関心層のうちでも、どれほどその関心度が深いかを測るひとつの重要なバロメーターが新聞に関する調査数値である。

新聞を「必ず読む」40.6%、「大体読む」34.5%、合計75.1%となり、4人のうち3人はだいたい毎日、新聞を読んでいることになる。この率は例年どおりである。

男女別の差はほとんどない。

大学別では、だいたい毎日、新聞を読むのは、大阪大学82.0%をトップにほとんどの大学が70%台であり変化はないが、大阪産業大学だけは63.8%で、この数値はこれまでの調査の中でもかなり低いものといえる。

(10) 興味をもって読む紙面

表 I-10-a 一番興味をもって読む紙面の上位4位

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
ス ポ ー ツ	35.3	33.1	36.1	32.0	44.3	40.4	44.2	45.6	19.5	17.4	17.2	19.2
社 会	26.8	30.8	25.9	28.5	20.2	27.6	21.2	19.6	39.1	37.5	36.5	36.0
文 化・科 学	14.7	12.9	12.4	11.5	15.7	14.1	11.7	12.6	12.9	10.4	14.1	10.0
政 治・経 済	9.5	9.4	10.5	10.1	11.7	11.2	12.8	14.6	5.4	5.8	5.2	5.7

(87年調査の場合、女子の「家庭・婦人」面の率は8.4%で「政治・経済」面を上回っている)

表 I-10-b 新聞で念入りに読む記事の全国調査

(%)

	社 会	地 方 版 (地元のニ ュース)	家庭・婦人 ・若者・健 康	政治・国際	スポーツ・ レジャー	社説・投書 ・コラム	経済・商況	学芸・文化 ・宗教	科学・技術	テレビ・ラ ジオ番組・ その他
87年	18	16	15	13	11	9	8	2	1	7
81年	20	12	17	12	11	6	7	3	-	12

出典：「朝日新聞」'87. 10. 14

新聞を読む層の割合はかなり高いが、政治的関心度の関連で一番問題となるのは、新聞のどのような記事に興味をもっているかということだ。この意味で、「スポーツ」35.3%、「社会」26.8%、「文化・科学」14.7%、「政治・経済」9.5%という順位と比率は、現代学生の政治意識を正直に表わしている。この順位と比率は、80年代にわたってずっと変化はない。なお参考のため、「朝日新聞」による調査結果を示しておく(87年9月実施、3,000人対象、表 I-10-b)。単純な比較はできないが、学生のスポーツ好きは、少々目立っている。

男女別では、かなりの違いがある。男子は、「スポーツ」、「文化・科学」、「政治経済」で女子を上回る。女子の場合は、男子とは全ったく違ったパターンを示している。「社会」39.1%、「スポーツ」19.5%で男子とは1、2位が入れ替り、3位が「その他」13.8%で、以下「文化・科学」12.6%、「家庭・婦人」8.4%、「政治・経済」5.4%の順となっている。これらについては、経験上も確かめられることで、多くのコメントを必要としないであろう。

大学ではかなりバラつきがあり、「スポーツ」で大阪産業大学56.6%、「社会」で帝塚山短期大学43.8%、「文化・科学」で大阪大学23.8%、「政治・経済」で大阪大学16.7%と、それぞれの面で1位を占めている。

(11) 憲法第9条に対する態度

表 I-11 憲法第9条に対する態度

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
改定反対	65.4	55.5	62.8	58.2	60.7	55.1	61.2	57.1	73.4	56.5	66.4	59.3
どちらともいえない	24.3	32.9	25.6	28.4	26.1	31.4	25.3	25.5	21.4	35.8	26.5	31.0
改定賛成	8.9	10.6	9.7	11.9	11.5	12.5	11.9	16.3	4.3	6.5	4.9	8.0

憲法第9条の改定は是が非かという論争は、戦後日本の政治的論争のうち最大のものである。憲法施行40周年にあたる年の今回の調査では、「改定反対」65.4%で前回よりも10ポイントも上昇し、これまでの調査では一番高い数値を示している。この間の防衛問題の中心的な議論は、防衛費対GNP1%枠突破の是非をめぐるものであった。「朝日」「毎日」の両新聞は1%枠順守のキャンペーンを張り、野党もそれなりにこの問題を取りあげ、ある程度の世論の盛り上がりもあった。恐らく、この関連で「改定反対」の数値が上がったものと推測される。

全国的世論調査でも、第9条支持派は増加している。「毎日新聞」調査(87年3月実施、対象3,000人)では憲法第9条の「支持派」は80%になり前回調査(82年4月)よりも10ポイント上昇し、「支持しない」のは16%に減少し9ポイント下がった。なお、このうちで男女別で比較すると、「支持派」の女83%、男77%で、女性が男性よりも第9条の支持率の高いことが分かる。

学生の場合、男子の「改定反対」は女子よりも13ポイント近く下回り、逆に「改定賛成」は7ポイント以上も女子を上回った。「どちらともいえない」という曖昧派も男子が女子を5ポイント上回った。他の問題では、「どちらともいえない」と答える層は、大体女子に多いが、憲法第9条改定にかぎっては、女子の意見は男子よりもはっきりしており、しかも改定反対が4分の3近くに迫っている。

大学別では、「改定反対」で三重短期大学78.4%、三重大学72%と70%台を越し、逆に大阪産業大学54.2%、大阪経済大学48.4%となっている。

(12) 自衛隊に対する態度

表 I-12 自衛隊に対する態度

(%)

	全 体				男				女			
	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年	87年	85年	83年	81年
解散すべき	14.4	13.7	13.6	15.0	14.9	14.0	14.9	18.2	13.4	12.8	10.4	11.9
縮小すべき	22.2	9.4	32.9	23.3	18.6	10.3	28.2	18.2	28.6	7.7	43.3	28.3
現状のまま	47.8	58.3	34.7	37.8	51.3	57.4	36.9	38.2	41.4	60.5	29.9	37.2
強化すべき	5.7	8.8	9.5	13.0	8.0	11.3	11.5	17.6	1.7	3.7	4.9	8.8
わからない	9.3	9.7	8.9	10.5	6.4	6.8	7.8	7.5	14.6	15.3	11.6	13.1

自衛隊に対する態度は、「現状のまま」47.8%、「縮小すべき」22.2%、「解散すべき」14.4%の順であるが、昨年よりも「現状のまま」が約10ポイント低下し、「縮小すべき」が5ポイント増加した。一方、「強化すべき」は5.7%となって、前回よりも3ポイント低下し、これまでの調査で最低となった。この結果は、自衛隊は諸外国の軍隊に比べて小規模なものであるとす

るこれまでの政府や自民党の主張がGNP1%問題の議論を通じてあまりあてにならないものであり、自衛隊は西側軍隊でも有数の戦力を有するものであることが、次第に学生の間にも明らかになってきたことの現れだ、と解釈できるのではあるまいか。

男女別では、「縮小すべき」で女子が男子を10ポイント上回り、「強化すべき」では、女子は1.7%と極めて低い。

大学別ではかなりバラつきがあり、「現状のまま」で大阪経済大学67.2%、「縮小すべき」で三重短期大学43.1%、「解散すべき」で大阪大学20.7%と、それぞれトップとなっている。一方、「強化すべき」で突出しているのが大阪産業大学14.2%である。

(13) 軍事予算に対する態度

表 I-13 軍事費の対GNP比1%突破問題に対する態度

(%)

	全 体		男		女	
	87年	85年	87年	85年	87年	85年
1%突破支持	7.2	10.0	10.1	11.6	1.7	6.5
1%以内なら支持	33.9	31.2	34.5	31.7	33.4	30.4
1%でも多過ぎ削減すべき	33.2	30.8	30.3	29.9	38.3	32.7
ゼロにすべき	15.4	12.6	16.3	13.0	14.0	13.6
わからない	10.0	15.2	8.5	13.6	12.6	18.5

軍事費の対GNP1%枠は、87年度予算で初めて突破されたが、ちょうどこの年に行われた今回の調査で学生たちはどのように答えたのであろうか。

「1%でも多すぎるから大幅に削るべき」33.2%、「ゼロにすべき」15.4%、合計48.6%が軍事費削減ないし全廃を求めている。これは前回よりも約5ポイント増となっている。これに「1%以内に抑えれば支持する」33.9%を加えれば、1%突破反対は82.5%に達する。一方、「1%突破支持」は7.2%で、前回より約3ポイント低下している。これらを新聞などの世論調査と比較すると、「毎日新聞」調査(87年2月実施、東京23区、5政令都市、1,040人対象)では77%が1%枠突破に反対し、「日本世論調査会」調査(87年3月実施)では59%が1%突破に反対していた。1%問題では学生の動向は大体世論に忠実なことが分る。

男女別では、「1%でも多すぎるから大幅に削るべき」で女子が男子を約8ポイント上回り、「1%突破支持」では男子10.1%に対して女子1.7%で、女子のほとんどは1%突破を支持していない。

大学別では、「ゼロにすべき」で三重大学20.2%、大阪大学19.9%と20%前後となっているが、他方、1%突破支持で10%を超したのは大阪産業大学で16.1%となっている。

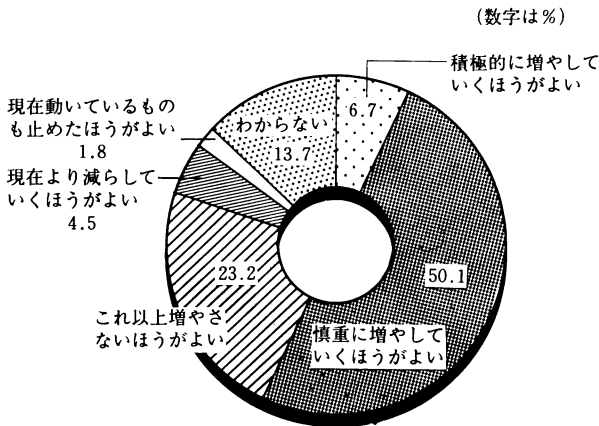
(14) 原子力発電に対する態度

表 I-14 原子力発電に対する態度

(%)

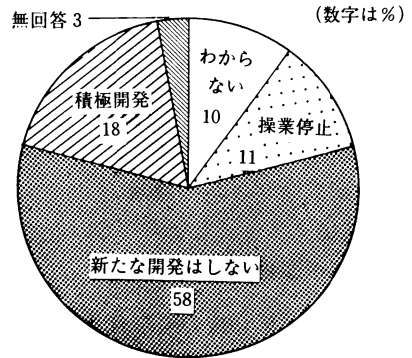
	全 体		男		女	
	87年	85年	87年	85年	87年	85年
新設・増設にも賛成	21.5	35.8	28.2	43.8	8.9	20.2
新設・増設反対、現状維持	40.6	33.0	37.7	26.8	46.3	45.5
一切反対	13.4	9.6	12.3	10.8	15.1	7.4
わからない	23.7	20.8	21.2	17.8	28.6	26.7

図 I - 1 原子力発電の今後の割合



総理府調査
出典：「日経新聞」'88. 1. 4

図 I - 2 原子力発電についてどう思うか



「毎日新聞」調査
出典：「毎日新聞」'86. 6. 12

チェルノブイリ事件以後の学生は原子力発電にどのような態度をとっているのだろうか。原子力発電の「新設・増設にも賛成」21.5%で、前回調査よりも約14ポイント低下している。「現状のままなら賛成」40.6%で前回より約8ポイント上昇している。「一切反対」は13.4%で約4ポイント上昇している。こうみると、学生は、現状を認めるけれども、「一切反対」を含め新・増設には過半数の学生が反対していることになる。前回は、まだこれが42.6%にしか達していなかった。原子力発電の問題で特徴的なことは、前回も今回も「わからない」とする学生が20%を超していることである。まだまだ原子力発電の本質が学生たちに知らされていないことを、この数字は物語っている。

参考のために、総理府の「原子力に関する世論調査」(87年8～9月実施。20歳以上3,000人対象)を示しておく。それによれば、原子力発電に対して何らかの不安を抱く人がこの調査で過去最高の86%に達した。原子力発電の今後については、「積極的にふやす」が6.7%にとどまり、「慎重にふやす」50.1%、「現状維持」23.2%、「現在より減らす」45%、「現在運転中のものも停止」1.8%、「わからない」13.7%となっている。国民の約30%が原子力発電の現状凍結ないし削減・廃止を望んでおり、原子力発電賛成派も圧倒的多数がその開発にあたっては、慎重さを要求していることが分る。とはいえ実は回答者は「慎重」ということにウェイトをおいたのか、「増やす」にウェイトをおいたのか、この設問の仕方では不明であり、この意味ではこの選択肢は一種の「誘導」的設問ともいえる(図I-1)。

したがって、質問の設定の仕方では別の結果も出ている。「毎日新聞」調査(86年5月実施、対象3,000人)では、原子力発電について、「新たな開発はしない」58%、「操業停止」18%で、合計すると76%がこれ以上の原子力発電を望まないか中止を要求していることになる。「積極的開発」は18%にすぎない。この調査がチェルノブイリ事件のわずか1カ月余後のものであったという事情を考慮しても、総理府調査とは大きな食い違いをみせており、このことは、世論調査の取扱いには、慎重な態度が要求されることを改めて痛感させている(図I-2)。

学生の場合、男子の28.2%が「新・増設」に賛成していることに対して、女子は約その3分の1以下の数値となっている。女子は、「現状のまま」、および「一切反対」で男子を上回っている。

大学別では、「新・増設賛成」で大阪産業大学31.6%、大阪大学29.7%と高い数値を示し、一切反対で「三重大学」22.9%がトップとなっている。

全体として学生の政治意識は、変化している。前回に比較した場合の、政治的関心の高まり、政治的満足度の低下、憲法第9条、自衛隊、軍事費1%、原子力発電等の問題で政府与党の政策に対する批判的態度高まり、これらはすべて相関している。今回の調査の近い時点で、チェルノブイリ事件、87年度予算での軍事費の対GNP1%突破、売上税法案上程・廃案、など政治的、社会的重要な事件が相次ぎ、これらの問題がマスコミを通じて論じられ、学生のさまざまな関心を呼びおこしたものと考えられる。社会党、共産党に対する支持率が久しぶりに高まったのもその反映であろう。だから、世上よく若者たちの政治ばなれが比判の対象になるが、問題は逆で、政党の側が、とくに野党の側が若者たちの関心を惹きつけるような政治を行っていない、というところに本当の問題がある。今回の調査は、改めてこのことを示しているように思われる。この見地からみれば、学生の政治的関心度が高まっているにもかかわらず、「支持政党あり」の割合が年々低下し、今回最低になったことは、現存の諸政党にほぼ魅力がないことの現れだといえよう。

今回の調査のもう一つの特徴は、これまであまりはっきりとは出てこなかった各大学の学生カラーの違いというものがある程度でてきたことである。一言では表現するのはむずかしいが、それぞれの項目をみれば、一定の傾向が読みとれるようだ。

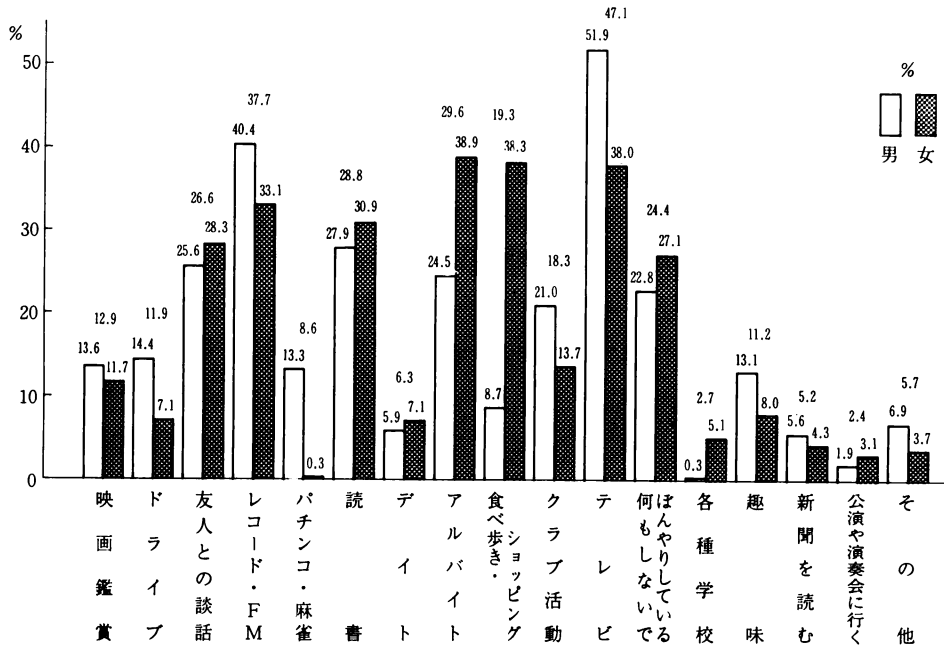
第Ⅱ部 余暇と読書

(1) 余暇の過ごし方

余暇の過ごし方(17項目中3つまでの選択回答)については、第1回から第4回まで毎回連続して「レコードやFM放送を聞く」が第1位を占め、学生の高い音楽愛好度が指摘されてきた。しかし、今回の調査では、なぜかそれが第2位(37.7%)に落ち、群を抜いて第1位が「テレビを見る」(47.1%)であった(図Ⅱ-1)。男子学生では何と51.9%が、女子学生でも38.0%が「テレビを見る」と回答した。ちなみにその高率の内訳を大学別に先取りしてみると、わが大阪産業大学の61.9%が、また群を抜いている(表Ⅱ-1)。「聞く」から「見る」へのこの逆転を何と解説したらよいであろうか？ おそらく、ここには昨今のビデオブームが反映しているのであろう。大学生をひきつけるテレビ番組が近年急増したと考えるよりも、彼らが好みのビデオを選択して「テレビで見る」ことが急増したとでも考えなければ、この現象は理解しにくい。経年比較を意図するあまり、1980年以来統一の17項目を設定し、街角のビデオショップを見のがしたこと、またコンパクト・ディスク、テレビのサラウンド・システム等、刻々変化し新しく登場するオーディオ機器をも見のがしたことが、思いがけずも解説の筆の運びを鈍らせる結果となった。「テレビを見る」のか「テレビで見る」のか、いずれにせよ、しかし、余暇にはテレビ画面と向き合う学生たちが急増していることは事実である。

テレビとレコード・FMに次いで第3位には「アルバイトをする」29.6%(男24.5%、女38.9%)、第4位には「読書」28.8%(男27.9%、女30.9%)、そして第5位には「友人との談

図Ⅱ－１ 余暇の過ごし方



表Ⅱ－１ 余暇の過ごし方 (大学別)

	1 位	2 位	3 位	4 位
大阪産業大学	61.9% テレビ	41.3% レコード・FM	25.2% ドライブ	25.2% 友人との談話
大阪経済大学	47.5% アルバイト	45.1% テレビ	32.0% レコード・FM	27.9% 友人との談話
大阪大学	47.7% テレビ	40.6% 読書	38.7% レコード・FM	32.0% クラブ活動
三重大学	44.5% テレビ	41.7% レコード・FM	31.7% 読書	29.8% 何もしないでぼんやり
帝塚山短期大学	46.0% 食べ歩き・ショッピング	39.5% アルバイト	34.7% テレビ	33.1% 友人との談話
三重短期大学	52.9% アルバイト	46.1% テレビ	40.2% レコード・FM	37.3% 食べ歩き・ショッピング

話」26.6% (男25.6%、女28.5%)が高い比率を示しており、これらは順位に変動こそあれ、比率的には前回の調査とほぼ肩を並べている。アルバイト率の女子優位にも変わりはない。それよりも、今回の調査に特徴的なことは、それらと比率的には大差なく、第6位に「何もしないでぼんやりしている」24.4% (男22.8%、女27.1%)が顔を出していることであろう。これを経年比較して、前々回17.9% (男18.5%、女16.4%)、前回18.5% (男17.0%、女21.6%)からの大幅増に目をとめると、アルバイト、読書、友人との談話に時を過ごす学生像が描き出される反面に、テレビと向き合うか、それとも「何もしないでぼんやりしている」学生像が浮かびあがる。

このネガティブな学生像は、文字どおり、行動面においては消極的な印象を与えはする。しかし、このネガティオンは、余暇の本来を考えると、忙しく時を消費するよりもかえって、それこそ学生本来の余暇の過ごし方であるとも映るであろう。目まぐるしい変化のなかであわただしく時を数える現代社会へのネガティオン、これが現実には忙殺されまいとする無意識的な自己防衛策をとる学生像となって、ここに現われていると思えてならない。社会的には負の価値を示すものも、学生生活においては正の価値を含みうる。ちなみに、三重大学では、これが29.8%の高率を示し、第4位に位置している。

そういう意味を含めて、改めて大学別の余暇の過ごし方(表Ⅱ-1)を眺めると、テレビ、レコード・FMの項目はすべての大学に共通して表われているが、それ以外の項目に各大学の学生像を彷彿とさせる項目が表われているように見える。たとえば、大阪産業大学には第3位に「ドライブ」25.2%があり、大阪経済大学には第1位に「アルバイト」47.7%、大阪大学には第4位に「クラブ活動」32.0%、三重大学には上述の「何もしないでぼんやりしている」29.8%、帝塚山短期大学には第1位に「食べ歩き・ショッピング」46.0%、三重短期大学には第1位に「アルバイト」52.9%の高率がある。

(2) 1週間の時間の使い方

余暇の過ごし方からして気になるのがテレビ視聴時間であるが、これは今回の調査でも3時間～14時間未満との回答率が男女とも最も高く、男41.8%、女46.0%(表Ⅱ-2)であった。しかも、第3回以来、男女とも回答はここに集中する傾向にある(男32.0→40.5→41.8%、女43.7→45.2→46.0%)。しかしながら、前回までにも指摘されてきたとおり、男子学生ではこれを越えて週14時間以上テレビを見ると答えた者がなお41.3%を占めるのに対して、女子学生ではそれが27.1%であった。最近3回の調査を総合して見ても、週14時間以上テレビを見る割合は、男子学生では4割を越えるのに対し、女子学生では3割に満たない。男女間の差はなお歴然としているが、テレビ視聴時間は全体として週3時間～14時間未満に定着しつつあるというところか。

これに対して、読書時間は、今回は男女とも週3時間未満との回答が目立った(男42.0%、女43.1%)。とくに女子学生の場合、この回答がトップを占めたのは初めてのことで、第1回

表Ⅱ-2 一週間の時間の使い方

(%)

		0 時間	3時間未満	3時間～ 14時間未満	14時間～ 21時間未満	21時間～ 28時間未満	28時間以上
読 書	男	13.5	42.0	35.9	7.2	0.8	0.6
	女	6.0	43.1	41.1	6.6	2.3	0.9
テ レ ビ	男	4.8	11.9	41.8	23.2	10.7	7.4
	女	4.9	22.0	46.0	15.4	9.1	2.6
ラ ジ オ レ コ ード	男	7.2	28.2	39.7	13.0	8.3	3.5
	女	6.6	38.0	35.4	14.6	2.3	3.1
クラブ活動	男	51.9	8.7	24.7	7.4	4.6	2.1
	女	59.4	12.6	20.0	5.1	1.4	1.1
アルバイト	男	54.5	5.3	23.2	7.1	5.4	4.3
	女	40.6	5.7	31.4	14.6	5.4	2.3

から第4回まではいずれも週3時間～14時間未満の回答率が首位であった。それが首位で安定していると考えられた女子学生の読書時間が減少したのと同時に、前回は増加傾向にあると指摘された男子学生のそれも、今回はまた逆もどりしたわけである。0時間との回答をも合わせると、男55.5%、女49.1%、全体としては53.3%の学生が、週3時間未満しか読書していないということになる。読書内容については後述のとおりであるが、学生が100人いたら、週21時間以上の読書家はそのうちの2人と考えられてよい。もちろん、パソコンやワープロ、それにビデオ教材等の普及が急である今日では、読書がすなわち勉学であると短絡的に考えるわけにいかないのは、われわれの研究形態を見てもしかりであろう。われわれの周囲にも、最新機器を操作する「研究者」は増えたが、黙々と読書する「学者」は少なくなった。そういう実感をもって、再び「過暇の過ごし方」(表Ⅱ-1)をふりかえってみると、大阪大学と三重大学のみ「読書」の項目が見えるのは、今や学生意識の古典派の表明でしかないのであろうか。

「ラジオ・レコード」に費す時間についても、とくに女子の経年比較において「読書」と類比的な減少傾向が見られる。すなわち、第1回を除けば、これまで男女とも、3時間～14時間未満との回答率が毎回首位にあったが、今回は女子の場合これが2位35.4%に落ち(前回との比較では-6.9ポイント)、1位が3時間未満38.0%(前回との比較では+8.5ポイント)であり、男子の場合は順位に変動はなかったものの、0時間7.2%、3時間未満28.2%がポイントを上げ、3時間以上が減少した。

これら「読書」と「ラジオ・レコード」の減少分が、おそらく「テレビ」の増加に対応しているのであろう。しかし、このことでただちに、一昔前ならそういえたであろうように、学生の学習意欲と音楽愛好度の減少を指摘することは、やはりできないであろう。テレビは今や、それで映画を、ステレオ音楽を楽しむことができる機能をそなえ、また、キャプテン・システムや衛星放送、文字放送など、情報化と国際化の時代における欠くべからざる情報源となって、われわれの学習形態を、この80年代に大きく変化させたといえるからである。これに加えて、「ラジオ・レコード」という範疇も、やや古めかしいものになりつつある。ラジオは、ステレオ・ラジカセであり、レコードはCDプレーヤーを組みこんだミニ・コンポの一部を占めるに過ぎなくなっている。テレビもラジオもレコードも、それ自体として単独に存在しがたくなっているところに、はからずもまた、たかだか10年の比較意識調査の困難を思い知らされる。

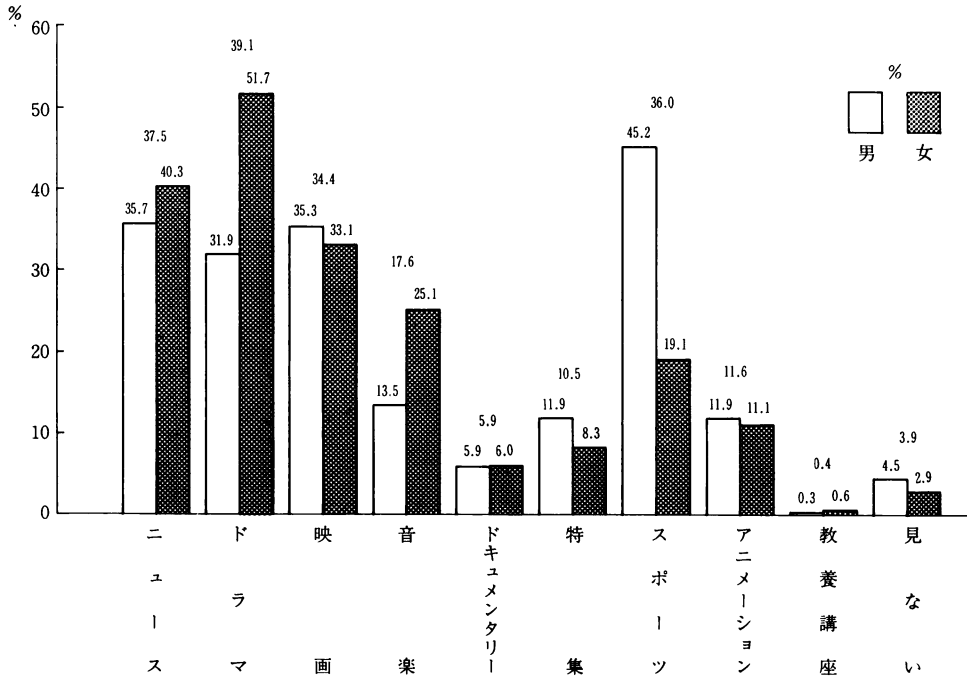
なお、「クラブ活動」と「アルバイト」に関しては、今回もまた0時間回答が圧倒的に1位を占めているという傾向に変わりはなかった。全体としての傾向がこうであるから、大学別の余暇の過ごし方(表Ⅱ-1)において、これらの項目が上位に位置していた大学は、それぞれの学生生活の特徴を如実に示していると再確認できるであろう。

(3) テレビ・ラジオ番組

よく見るテレビ番組の上位は、ドラマ39.1%(男31.9%、女51.7%)、ニュース37.5%(男35.7%、女40.3%)、スポーツ36.0%(男45.2%、女19.1%)、映画34.4%(男35.3%、女33.1%)の順となっており、ドラマとスポーツには依然として男女差が著しい(図Ⅱ-2)。

男女別に上位を並べてみると、男子学生ではスポーツ、ニュース、映画、ドラマの順になり、女子学生ではドラマ、ニュース、映画、音楽の順になる。注目されるのは、ニュース視聴率の上昇である。前回と比較して、8.5ポイントの上昇、前々回からは13.1ポイントの上昇が目をはく。この上昇は、最近のニュース番組ブームを如実に示すものであろう。各テレビ局は、ニ

図Ⅱ-2 よく見るテレビ番組

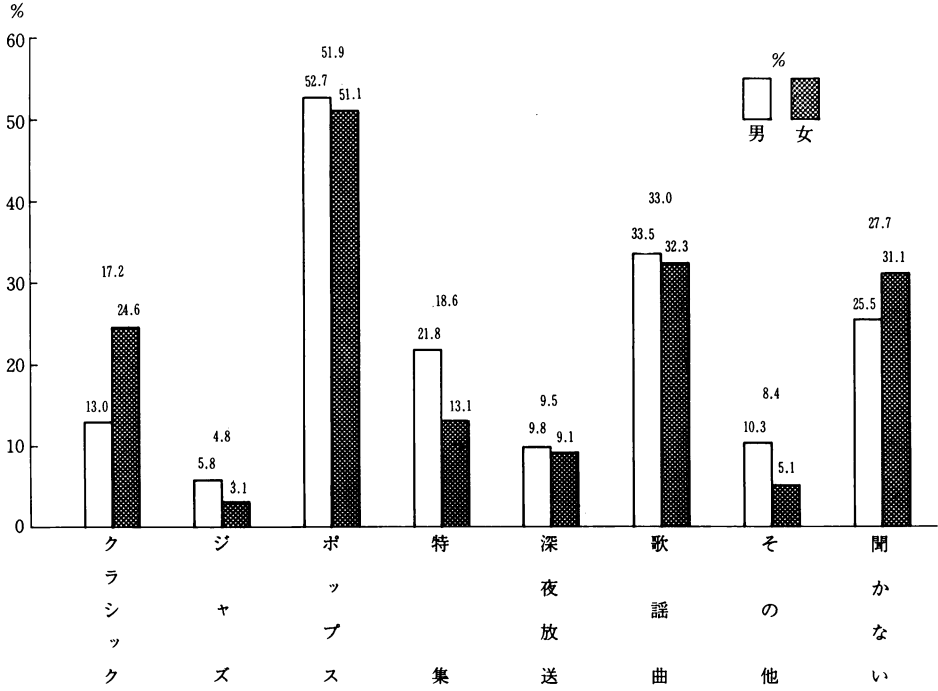


ユース・キャスターの個性化、情報の多様化等によって、ニュース番組に工夫をこらし、視聴率を競っている。そして、視聴率の上昇が、おそらくまた、政治的関心層がこれまでの調査のうちで最も高い数値を示したこと(第Ⅰ部 政治意識)の一因となっているのであろう。正しく知らされているか否かは別にして、この傾向は、とりあえず歓迎されるべきであろう。

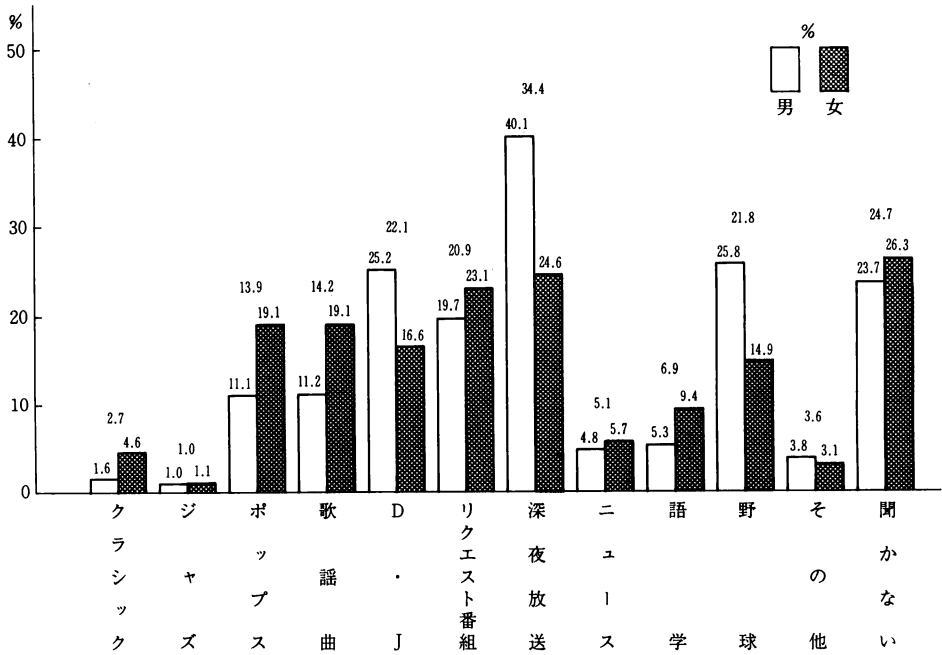
ラジオ番組のうちFM放送については、相変わらず、ポップス51.9%(男52.7%、女51.1%)、歌謡曲33.0%(男33.5%、女32.3%)の人気が高い(図Ⅱ-3)。この両者の人気の高さはとくに第3回以来のものであるが、強いて今回の特徴を挙げれば、両者ともに男女差がなくなり、その人気の高さにやや陰りが見え始めたことであろうか。それらがやや人気を下げた分だけ、クラシック17.2%(男13.0%、女24.6%)が人気を高めた。とくに女子学生のクラシック志向は顕著であり、過去最高の人気度を記録した。世の懐古的風潮からして、今後もこの傾向は強まるのではあるまいか。なお、FM放送を全く「聞かない」層も27.7%(男25.5%、女31.1%)あり、これは第2回に次いで第2位の高率であった。

AM放送については、番組別に男女差がかなり大きく、深夜放送34.4%(男40.1%、女24.6%)、D・J22.1%(男25.2%、女16.6%)、野球21.8%(男25.8%、女14.9%)、リクエスト番組20.9%(男19.7%、女23.1%)が比較的によく聞かれている(図Ⅱ-4)。聞かれている上位番組にあまり変動はないが、野球(男子の高率による盛り返し)を除いて、おしなべてその聴取率を下げている。「聞かない」層は24.7%(男23.7%、女26.3%)で、全体の第2位であった。4人に1人の割合で、AM放送を聞かない学生がいることになる。ラジオを聞かない傾向は男子よりも女子に強いことがこれまでに指摘されてきたが、今回はその較差が縮まり、男子学生にその傾向が増大していることも注目される。

図Ⅱ-3 よく聞くFM番組



図Ⅱ-4 よく聞くAM番組



(4) 読書傾向と好きな作家

表Ⅱ－3は最近読んだ本ベストテンの男子学生の結果である。『竜馬がゆく』がトップであるが、これは前回調査と同じ結果である。また、『大学生の読書生活、第2回大学生読書生活実態調査報告書87年版』（全国大学生協同組合連合会編）でも、本書は第2位を占めており、感動した本でも第2位にあげられている。

現代の学生の政治的アバシー化がさげばれている昨今であるので、激動の維新の時代を理想に燃えて生き抜いた青年坂本竜馬にある種の感情移入をするというのはちょっと首をかしげたくなる向きもあろうかと思われようが、筆者はむしろ、現代の日本は日常的レベルで維新を迎えているのではないかと思えてならない。つまり、日本人から地球人へとアイデンティティを拡大しなければ乗り越えることができない国際情勢の中で若者の感性はすでにその事を感じているのではなかろうか。あたかも竜馬が当時、一つの藩の人から日本人へと越え出たように……。現代の大学生はフィクションよりノンフィクションを好む傾向があるといわれているが、『ドキュメント・サラリーマン』『ユダヤが解ると日本が見えてくる』等、上位に顔を出しているのはドキュメント・ノンフィクションのジャンルである。大学生が、S.F.、オカルト、神秘主義的な方面への興味を増大させつつ、一方ではしっかりと現実を見て行こうとする二極化の傾向のあらわれといえるのではないだろうか。

『三国志』、『ころ』、『項羽と劉邦』といったところは、かなり根強い人気を保っているといえるであろう。前回調査(第4回)と今回調査とを通じてベストテンに入っている『プラトーン』は映画化の影響であろう。戦争をえがきながら反戦を訴える映画である。大学生らしい選択であるといえるだろう。

表Ⅱ－4は女子学生の読んだ本ベストテンである。『氷点』が第1位であるが、本調査では第2回調査で第6位になっただけで、その他ではベストテン入りはしていない。前述の『大学生の読書生活』の調査では、『氷点』は23位であるが、感動した本の著者名では2位、関心のある著者では9位、女子学生の関心のある著者では1位となっている。最近徐々に人気の上昇している作家の一人であると考えて間違いのないであろう。『されどわれらが日々』が3位とな

表Ⅱ－3 読んだ本ベストテン (男子)

順位	書名	度数
1	竜馬がゆく	8
〃	ドキュメント・サラリーマン	8
3	ユダヤが解ると日本が見えてくる	7
〃	三国志	7
5	ころ	5
〃	プラトーン	5
7	項羽と劉邦	3
〃	近代日本思想史序説	3
〃	老人と海	3
〃	量子力学	3

表Ⅱ－4 読んだ本ベストテン (女子)

順位	書名	度数
1	氷点	5
〃	されどわれらが日々	5
3	兎の眼	4
〃	女坂	4
〃	坊っちゃん	4
6	暗夜行路	3
〃	女の一生	3
〃	源氏物語	3
9	赤毛のアン	2
〃	ウォーターシップダウン	2

っているが、近年、柴田翔の本が顔を出すのは珍しいといえる。彼の本は、70年代前後の学生が好んで読んだ本である。ちなみに、柴田は本調査の第1回調査(1980)において、女子学生の好きな作家で10位に入っている。『兎の眼』は女子学生には人気のある本である。第1回調査では2位、第2回調査では9位となっており、第3回、第4回では姿を消していたが、第5回目で復活している。『大学生の読書生活』でも、関心ある作家、感動した作家で灰谷健次郎は常に上位にあげられている。6位の『源氏物語』は、アニメブームにのり映画化されたり、新解釈が出たりといった話題性をもっているため上位に入ったものと思われる。若い女性の永遠の恋人とも目されてきた光源氏が、実はマザーコンプレックスであったといった解釈は現代的な大学生の恋愛状況を適確に反映していると思えてならない。今は女子大生が男子学生をその未成熟さの故にふるケースが圧倒的に増えている。母親から自立していない男の子に愛想をつかせるのだ。女の子の依存願望は満たしてはくれないが、逆に母性は満たされるといったアンビバレントな状況が今の若者の恋愛のパターンだと言えるであろう。そのような両価性を持った主人公としての光源氏はまさに現代的恋愛状況の投影の産物であろうと思われる。

(5) 好きな作家

表Ⅱ-5は男子学生の好きな作家ベストテンであるが、ここ数年は赤川次郎が常に1位である。また星新一、西村京太郎、司馬遼太郎といった作家は常に上位にあがってきている。夏目漱石はかつて本調査において国民的作家として扱うべきである旨のことを指摘したが、今回の調査においても5位に入っており固定した人気を保っているというべきであろう。表Ⅱ-6の女子学生の好きな作家ベストテンをみても2位に入っている。男子学生の傾向で少し変わったところは、アガサ・クリスティーが7位に入っているところであろう。以前の調査では、クリスティーは常に女子学生に人気の高い作家であった。女子学生に推理小説ばなれが起こっている一方、男子学生の方は、西村京太郎が4位、クリスティーが7位と推理作家が2人も入っている。

大学生の推理小説離れについては『大学生の読書生活』においても指摘されている。北方謙三といった男性傾向の強いものがやはり男子学生に読まれているようである。マークトウェイン

表Ⅱ-5 好きな作家 (男子)

順位	作家名	度数
1	赤川次郎	44
2	星新一	20
3	司馬遼太郎	18
4	西村京太郎	17
5	夏目漱石	16
6	筒井康隆	10
7	アガサ・クリスティー	9
8	北方謙三	8
〃	マークトウェイン	8
10	菊池透行	7

表Ⅱ-6 好きな作家 (女子)

順位	作家名	度数
1	赤川次郎	23
2	夏目漱石	16
3	田辺聖子	14
4	灰谷健次郎	11
5	永井路子	9
6	遠藤周作	7
〃	渡辺淳一	7
8	三浦綾子	6
9	新井素子	5
〃	星新一	5

表Ⅱ-7 関心ある著者

	男子学生	女子学生
1位	司馬 遼太郎	三浦 綾子
2	本多 勝一	灰谷 健次郎
3	落合 信彦	村上 春樹
4	夏目 漱石	遠藤 周作
5	赤川 次郎	赤川 次郎、大宰 治、田辺 聖子

全国大学生協編「大学生の読書生活」より

表Ⅱ-8 関心あるテーマベスト5

	男子学生	女子学生
1位	円高、貿易摩擦	生き方
2	生き方	女性論
3	コンピュータ	大学生の心理
4	金融、財テク	精神分析
5	ハイテクノロジー	星占い、血液型

全国大学生協「学生の読書生活」より

ンのようなタイプの作家がベストテンに入るのは初めてであるが、これなぞも、男子学生の少年期への回帰傾向のあらわれであろうか。

表Ⅱ-7は「大学生の読書生活」の関心ある著者の男女別ベスト5である。

今回の調査と比較すると男子学生では本多勝一、落合信彦などは入っておらず、その他の著者はほぼ共通している。また女子学生の方では村上春樹が入っていないだけで他は共通している。また女子学生は女流作家を好むといわれているが、今回の調査ではベストテン内に4名、「大学生の読書生活」の方ではベスト5内に2名の女流作家があげられている。

表Ⅱ-8は「大学生の読書生活」の関心あるテーマ男女別ベスト5である。これをみても男子学生と女子学生の興味、関心の相違は明らかであるが、これは学生に限らず男女の関心の差としてもあてはまるであろう。男子学生の方はそのままビジネス、実学的傾向のものを好んで読むようである。一方女子学生は、精神的、文学的傾向が強く、中でも星占いや血液型性格判定などは女性の置かれた受身的立場と無関係ではないであろう。男女共通したテーマでは生き方の問題があげられるであろう。現代のような多様な価値観が許容される社会では生き方の問題は老若男女を問わず避けては通れない問題のようである。学生は経験と読書から生き方を模索する存在である。青春時代に影響を受けた本は大きくその人の人生を左右するであろう。男女の読書傾向の差はそのまま男と女の生き方を規定するであろう。

(6) 雑誌傾向

現代の学生の雑誌傾向は、①情報誌をよく読むこと、②現在の主たる関心は、コンピュータ、音楽、バイク、自動車、③コミック誌をよく読む、といったところである。今回の調査でもそれはよくあらわれている。表Ⅱ-9は雑誌ベストテンの男子学生の結果である。これを見ると上位5位までコミック誌である。「大学生の読書生活」をみても雑誌上位10位のうち6冊までがマンガコミック誌である。本調査では第1回から第5回まで一貫してマンガコミック誌が上

位ベスト3を占めてきている。80年代学生の大きな特徴の一つはやはりマンガコミックといえるであろう。週刊プレイボーイ、平凡パンチといったかつて学生をターゲットとした週刊誌は、コミックと情報誌に完全にその座を譲ってしまったといえるであろう。

ホットドッグプレス、ビッグコミックスピリッツはここ数年で売り上げを伸ばし、特に学生によって読まれるようになった雑誌である。表Ⅱ-10は女子学生の雑誌ベストテンである。ノンノは本調査のすべてにおいて第1位である。J.J.、Can Can といったところは、ここ数年やはり若い女性に人気が出てきた雑誌である。女子学生では、別冊マーガレットがマンガコミック誌中では圧倒的に人気があるようである。週刊少年ジャンプは女子学生にもかなり読まれているようであるが、やはり「北斗の拳」の人気であろう。「With」などはヤングアダルト向けのファッション雑誌といえそうであるが、女子学生にとっては多少価格も高く、定期講読というより、特集や記事によって時々買うというパターンが多いようである。男子学生がコミックなら、80年代の女子学生の一大特徴はアンノン族といわれる雑誌傾向に代表されるとみてよいであろう。

表Ⅱ-11は『大学生の読書生活』による男女別定期購入誌ベスト5である。これによると、前述の傾向は一目瞭然である。男子はマンガコミック一色である。女子学生の方は、3位にNHK ラジオ英会話があげられているのが興味深い。女子学生は英語を武器に就職を有利にしようという傾向もあるようである。

表Ⅱ-9 雑誌ベストテン (男子)

順位	雑誌名	度数
1	週刊少年ジャンプ	230
2	週刊少年マガジン	81
3	週刊少年サンデー	75
4	週刊ヤングジャンプ	63
5	ビッグコミックスピリッツ	40
6	FMステーション	27
7	ぴあ	26
8	ホットドッグプレス	19
9	ポパイ	15
〃	ヤングマガジン	15

表Ⅱ-10 雑誌ベストテン (女子)

順位	雑誌名	度数
1	ノンノ	102
2	アンアン	35
3	J. J.	34
4	別冊マーガレット	32
5	週刊少年ジャンプ	30
6	Can Can	28
7	ビビ	20
8	オリーブ	18
9	With	17
10	ララ	15

表Ⅱ-11 男女別定期購入誌ベスト5

	男子学生	女子学生
1位	少年ジャンプ	ノンノ
2	ビッグコミックスピリッツ	別冊マーガレット
3	ヤングジャンプ	NHK ラジオ英会話
4	ぴあ	Can Can
5	少年サンデー	J. J.

全国大学生協編『大学生の読書生活』より

Q (9) あなたは、憲法第9条についてどう思いますか。

1. 改定すべきである 2. どちらともいえない 3. 改定すべきではない

Q (10) あなたは、現在の自衛隊についてどう思いますか。

1. 解散すべきである 2. 縮小すべきである 3. 現状のままでよい
4. もっと強化すべきである 5. わからない

Q (11) 日本の軍事予算の対G N P比1%突破問題について、あなたはどうか考えますか。

1. 1%突破は当然だから 2. 1%以内に抑えれば 3. 1%でも多すぎるから、軍事予算は
支持する 支持する 大幅に削るべきである
4. 軍事予算はゼロにすべ 5. わからない
きである

Q (12) あなたは、原子力発電についてどう考えますか

1. 新設・増設にも賛成 2. 新設・増設には反対だが、 3. 一切反対 4. わからない
現状のままなら賛成

Q (13) あなたは、余暇を主にどのように過ごしていますか。次のうちから3つ選んで下さい。

1. 映画鑑賞 2. ドライブやツーリングをする 3. 友人との談話
4. レコードやFM放送を聞く 5. パチンコや麻雀をする 6. 読書
7. デイトをする 8. アルバイトをする 9. 食べ歩きやショッピング
10. クラブ活動 11. テレビを見る 12. 何もしないでぼんやりしている
13. 各種学校(英会話・コンピュータ・その他稽古事を含む)に行く 14. 写真など趣味にうちこむ
15. 新聞を読む 16. 公演や演奏会に行く 17. その他

Q (14) あなたは、次のことに一週間のうち何時間を費しますか。

	0 時 間	3 時 間 未 満	3 時 間 ~ 1 4 時 間 未 満	1 4 時 間 ~ 2 1 時 間 未 満	2 1 時 間 ~ 2 8 時 間 未 満	2 8 時 間 以 上
A 読 書	1	2	3	4	5	6
B テ レ ビ	1	2	3	4	5	6
C ラジヲ・レコード	1	2	3	4	5	6
D ク ラ ブ 活 動	1	2	3	4	5	6
E アルバイト	1	2	3	4	5	6

Q (15) あなたはテレビやラジオのどのような番組をよく見たり聞いたりしますか。それぞれについて2つ選んで下さい。

A テレビ 1. ニュース 2. ドラマ 3. 映画 4. 音楽 5. ドキュメンタリー
6. 特集 7. スポーツ 8. アニメーション 9. 教養講座 10. 見ない

B ラジオ

I	FM	1. クラシック	2. ジャズ	3. ポップス	4. 特集
		5. 深夜放送	6. 歌謡曲	7. その他	8. 聞かない
ロ	AM	1. クラシック	2. ジャズ	3. ポップス	4. 歌謡曲
		5. D・J	6. リクエスト番組	7. 深夜放送	8. ニュース
		9. equal	10. 野球	11. その他	12. 聞かない

Q (16) あなたは新聞を毎日読みますか。

1. 必ず読む 2. 大体読む 3. あまり読まない 4. ほとんど読まない

↓ Q (17) ~

Q (17) あなたが一番興味をもって読む紙面はどこですか。1つ選んで下さい。

1. 政治・経済 2. 社会 3. スポーツ 4. 家庭・婦人
5. 文化・科学 6. その他

↓ Q (18) ~

Q (18) あなたが、最近読んで印象に残った本を一冊あげて下さい。

Q (19) あなたが好きな作家を1名あげて下さい。

Q (20) あなたが、よく読む雑誌(コミックを含む)を3つあげて下さい。

フェース・シート

(1) 性別

1. 男 2. 女

(2) あなたが、在学する大学名を教えてください。

1. 三重短期大学 2. 大阪産業大学 3. 三重大学 4. 帝塚山短期大学
5. 大阪大学 6. 大阪経済大学

(3) あなたの家族の家計維持者の職業は何ですか。(備考参照)

1. 事務職 2. 管理職 3. 労働者(産業) 4. 労働者(商店員など)
5. 自営工商業者 6. 自由業者 7. 農林水産業者 8. その他、無職

